

新しい里程標

—あとがきにかえて—

ここに集録されている小文は、昭和四十五年四月から翌年十月に至る間、小生が農林中央金庫の社内報である「共助会報」にほぼ隔月ごとに連載したものである。いま改めて読んでみると未熟なところもあり、書き直したい気持もあるが、これはこれでその時点での小生の考え方、理解の程を示すものとしてそのままとし、明らかな誤字、脱字、思い違いを訂正したほかは一切手を加えていない。ただし写真は都合により一部変更をみざるを得なかった。

なお、巻末の「大原美術館長を囲んで」の座談会は昭和四十五年十月館長の藤田さんから美術館創設、生成過程の興味深いエピソードに満ちたお話をいただいたものである。一読して、一社内報だけに止めておくのは勿体ない内容であると思うのは小生のみではなかろうと思われる。そこで小生がアレンジしたことでもあり、再録することとした次第である。

連載が終った時、編集者の佐川さんから、この際、一冊の本にまとめてはどうか、あとでまとめると言っても時間がたてばたつほどその気になりがたいものですよ、というおすすぬめがあった。そこでこうゆうことに関心のある友人に相談してみると、やるべきである、これはお前の歴史にとってひとつのモニュメントみたいなものである、お前の子供たちもしかるべき年令に達すれば、おれのおやじはこの時期にこんなことをやっていたのかと、感心するかどうか、それは別としても、意味のあることではないか、という意見—これは市瀬威の意見であった、また、日本思想史に造詣が深く、書籍に愛着を持ち、最近では書からつとに現代絵画の領域にまで関心を深めつつある今井寿一郎は、出すべきである、かねがねそう思っていた、出すなら値段をつけたまえ、おれがしかるべき部数は引受けるぞ、と本にまとめることを強くすすめてくれた。

その当時の小生の気持としては、一冊の本にまとめたい気持はあったが、やはり内心忸怩(じくじ)たるものがあり、もっと質量ともに自信がもてるものでなければという気持と、さらに一冊の本を出すよりも一枚のしかるべき絵を求める方に一層の執着を感じていたので、それは沙汰止みとなっていたのである。

しかるに、今ここに敢えて、これらの小文を小冊子にまとめる所以のものは何か？ しかるべき理由がなければならぬであろう。すなわち、この小冊子は今や小生の新しい出発を示す里程標となったのである。

南画廊の志水楠男さんは戦後のわが国美術業界において、もっとも筋の通った仕事をしてきた一人であるといえよう。現代絵画史はすなわち現代思想史であるとするのが小生の観点であり、またこれは何もこと新しい考えではなく、当り前の話であるが、実際にそれを行なうということになるとそんなに簡単なものではない。ところが、それをまさしく実行してきたところに志水さんの真骨頂がある。六年前、加納光於の銅版画「星・

反芻学」を求めて逢ったのが、そもそもの交友の始りであった。それからしばらくして、サム・フランシスの石版画を求めたことが思い出される。

その志水さんが甚だ困難なる問題を小生に投げかけてきたのである、一緒に仕事をしないか、というのである。これは小生の全存在の根柢を揺がす大問題であり、この三ヵ月ばかり悩み抜いたが、氏のたび重なる強い要請もだしがたく、かつまた小生の内部から起る精神的必然性に抗しがたいものがあり、ここに二十年間の農林中央金庫の銀行生活に終止符を打ち、畏兄志水楠男の仕事を手伝うことに決心したのである。この小冊子は、この決定のモニュメントとして誕生したといえる。

小生のこの決定について、意見を求めるべくして如何ともなし得なかった尊敬する先輩が三人いる。そのひとりには奇しき因縁を持つ詩人の三好達治であり、もうひとりには伯父で俳人の桜井孝(柳城)であり、最後のひとりには最近ますますヴィヴィッドな存在となって現われてくる祖母はつである。三人とも小生の精神形成史のうえで決定的な意味と影響をもった人物であるが、すでに幽明境を隔て、逢うすべもない。したがってこの拙い小冊子はこの三人に捧げられる。三人ともそんなに笑わないでください。

佐谷和彦

昭和四十八年六月五日